

今号の内容

1. 長水支部教研
2. 諏訪支部教研
3. 松筑支部教研
4. 高水・須坂支部教研

教文通信アーカイブス

教文通信 No.1 (電子版)

新型コロナウイルス感染症
禍でのアンケート結果

教文通信 No.2 (電子版)

ジェンダー平等の教育を考
える総研資料

教文通信 No.3 (電子版)

職場教研報告

教文通信 No.4 (電子版)

上西充子さん (法政大学
教授) 講演会報告

教文通信 No.5 (電子版)

松川高校・理科研究会・教
文運営委員会報告

教文通信 No.6 (電子版)

「学びの『指標』(案)」討
議資料

教文通信 No.277 (紙版)

「コロナ後の教育はどうあるべきか」

勝野正章さん

(東京大学教授)

* 教文通信は、教文 HP の会員
専用ページでご覧になれます。

1. 長水支部教研報告

例年、長水支部教研は講演会と分科会の二本立てで実施をしてきました。



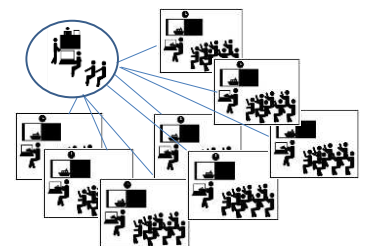
しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の影響を受け、第一回企画委員会(6月1日)で分科会の中止を決定しました。講演会については継続審議となり、その後新型コロナウイルス感染拡大第一波の終息を待ちながら具体的な検討に入りました。・・・

2. 諏訪支部教研報告

9月26日(土、)岡谷南高校を会場に諏訪支部教研が行われました。今年はコロナ禍にあり、小中学校の諏訪支部教研をはじめ多くの支部が支部教研を中止にする中で、高校の諏訪教研もその実施が危ぶまれましたが、「自主研修の灯を消さない」という先生方の思いを受けて何とか開催にこぎつけました。・・・

3. 松筑支部教研報告

9月26日(土)、本年度の活動テーマ「多様な学びの研究」のもと、松筑支部9校をオンラインで繋ぎ講演会のみ開催いたしました。国立極地研究所南極・北極科学館、サイエンスナビゲーター(ボランティア)川久保 守 氏にクイズを交えながら、講演して頂きました。



4. 高水・須坂支部教研報告

記念講演は清泉女学院大学准教授の北村先生にお願いした。地域の方ということで、今後のつながりが期待できる良い企画だったと思う。各分科会とも参加人数は少なかったが、それぞれに有意義な研究会と規模の大小にとらわれず、「実施する」ことが大事だと感じた。

・・・ (詳細は HP で)

長水支部教研報告

長水支部教文事務局長 宮下 由夫

例年、長水支部教研は講演会と分科会の二本立てで実施をしてきました。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の影響を受け、第一回企画委員会（6月1日）で分科会の中止を決定しました。講演会については継続審議となり、その後新型コロナウイルス感染拡大第一波の終息を待ちながら具体的な検討に入りました。



10月4日（日）、信濃毎日新聞の教育コラム「コンパス」を連載中の心理カウンセラー、内田良子先生による「コロナ禍に対する児童・生徒の心のケア（with コロナの学校生活）」を開催しました。当日は高校会館別館2階ホールをパブリックビュー会場に、ZOOMによるオンラインでの講演会となりました。冒頭、「新型コロナウイルスがもたらした新しい事態」についてのお話で講演会がスタートし、内田先生が実際に感じたリアルな状況を交えながら、「ウィズコロナで生きにくい時代を生きる子どもたちの暮らしと心」まで大きく7つの項目についてお話いただきました。また、児童・生徒の不登校や自殺を示す数字の推移をまとめた表や、「不登校の子どもの権利宣言」などを織り交ぜ、現場の教職員にも理解しやすい内容でお話いただきました。個人的には「不登校の子どもの権利宣言」の文面が衝撃的で、苦しい状況の中で子どもたちと指導者が、自分たちの願いを言葉にしてく様子が見えるようでした。講演終了後もパブリックビューで参加された先生方から熱心な質問が続き、予定時間を大きくオーバーしながら終了となりました。

コロナ禍で分科会など様々な企画を中止せざるをえない状況が続きましたが、厳しい環境の中でもオンラインなどを活用し、講演会（長水支部教研）が開催できたこと自体が大きな成果だったと感じています。



諏訪支部教研

諏訪支部教文事務局長 有賀 剛志

9月26日(土)、岡谷南高校を会場に諏訪支部教研が行われました。今年はコロナ禍にあり、小中学校の諏訪支部教研をはじめ多くの支部が支部教研を中止にする中で、高校の諏訪教研もその実施が危ぶまれましたが、「自主研修の灯を消さない」という先生方の思いを受けて何とか開催にこぎつけました。

コロナ感染を避けるため多人数が集まる全体会や講演会は実施できませんでしたが、午前中には教科別研究会を、午後には課題別研究会を行うことができました。

教科別研究会では国語、理科、英語、家庭科、情報が校内で研究会を行い、社会科は尖遺跡での巡研を行いました。コロナ下でのリモート授業のあり方、感染予防を考えた実習の方法、新指導要領に向けてのカリキュラムの研究など今年ならではの議論も進められました。午後の課題別研究会は図書館教育、教育条件整備、進路などの研究会が行われました。

工業、商業、農業の各研究会や学校保健の研究会は別日に別会場での実施となりました。各研究会で挙げられた推薦レポートについては来年度の支部教研のものと併せて来年度の県教研に提出されることになります。

小規模ではありましたが、自主教研の灯を来年度につなぐ貴重な研究集会として成功させることができたことに事務局として感謝しています。



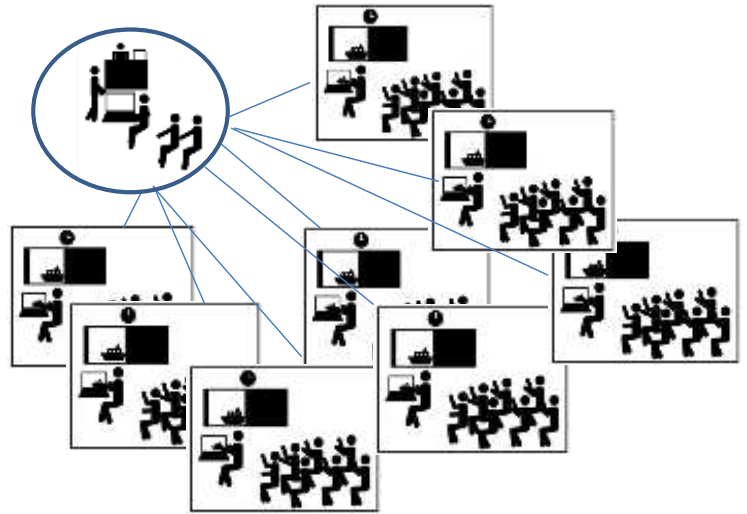
9月26日(土)、本年度の活動テーマ「多様な学びの研究」のもと、松筑支部9校をオンラインで繋ぎ講演会のみ開催いたしました。

「なるほど! そうなのか」—南極クイズにチャレンジと題して、国立極地研究所南極・北極科学館、サイエンスナビゲーター(ボランティア) 川久保 守 氏にクイズを交えながら、講演して頂きました。南極という遠い世界で起こっている自然現象を始めとした、さまざまな事柄をパワーポイントの映像と共にお話していただきました。大変好評で「南極に行きたい!」という感想もいただきました。

オンライン開催にあたり、教文委員会でのオンライン練習2回、個別オンライン練習1回、前週の土曜日に学校から通信確認。2日

前には講師の方にもお越しいただき本番さながらのオンライン練習。直前に「県立高等学校情報通信ネットワーク切替え」があり、不安を抱えての本番。無事に開催できたこと、多くの方々の協力があったからこそだと思います。開催に当たり、本部にはいろいろ相談に乗っていただき感謝いたします。

今後各研究会がコロナ禍でも活動が行えるよう事務局として支援していきたいと思っております。



高水・須坂支部教研

高水須坂支部教研は9月26日(土)に須坂東高校を会場に開催しました。新型コロナウイルス感染症第2波の下でしたが、実際に会って話すことが大事と思い、実施を決めました。会場校や実行委員、参加者のみなさまのご協力により感染防止対策をとり安全に教研開催を実施することができました。

午前中に課題別分科会(3分科会)さらに午後に教科別分科会(7分科会)を実施しました。分科会参加数は33名でした。

記念講演会は講師に北村千章さん(清泉女学院大学看護学部)をお招きし、「小児医療の進歩により変化した子どもたちの現状～医療と教育の協働～」と題してご講演をいただきました。

講演で北村さんは、小児医療の進歩により変化した子どもの現状を紹介されました。医療と教育現場の教職員

22q11.2欠失症候群

22番染色体長腕上にある微細欠失によって引き起こされる遺伝性疾患です。染色体の微細欠失の中では最も頻度の高い症候群であり、米国では1,000人に1人の出生であることが報告されています。

微細欠失部分の割合に個人差があることから、多岐にわたる症状が出現するといわれており、ひとりとして同じ症状を持った人はいません。

活動・支援内容

- 「学習サポートガイド」の作成
- 「学習サポートガイド」を用いた学校における医療教育
- 「22q at the Zoo」子どもと家族のふれあい交流会(5月に開催)
- Children's Hospital of Philadelphia 22q and You Centerでの調査等



「学習サポートガイド」

「学習サポートガイド」は、オーストラリアの22q11.2DSの子どもの家族が作成した「就学ガイド」を翻訳し、国内用に加筆したものです。22q11.2DSの子どもの発達特性や特徴、起こりうる合併症などの情報、それぞれの学年での達成目標や評価ポイントなどを掲載しています。

このガイドは、お子さんに関する教育現場の方々が、お子さんの持つ多様性を理解し合えるよう作成したものです。

サポートチームの医療教育担当者が学校に訪問し、このガイドが活用できるよう教育現場の方々に説明を行います。



問い合わせ先

清泉女学院大学 看護学部 准教授
NPO法人親子の未来を支える会 理事

北村 千章

MAIL

本活動は科学研究費助成事業の基盤研究(C)の助成を受け実施しています。またNPO法人親子の未来を支える会の協力において活動を行っています。



22q11.2 学習サポート

の協働が今度益々必要になると言われました。医療の進歩により医療的ケア児数はこの10年間で2倍に増えていること、在宅人口呼吸療法を受けている小児患者は10倍に増加していると現状を紹介されました。医療の進歩に社会制度や法律が追いついていかない状況があるが、今後はますます学校へ通う高度な医療的ケア児が増加するそうです。1960年当時、日本の乳児死亡率は39.8(対1000人比)で6万9千人弱でしたが、2015年死亡率は1.9にまで下がりました。長野県は1.6で全国1位の低さだそうです。このような状況ですが、出生児95万人の3~5%が先天性疾患を持ち、その原因の内訳は染色体疾患(25%)、多因子遺伝疾患(40%)、単一遺伝子疾患(20%)だと研究報告を示されました。小児医療の進歩により、先天性疾患を持つ子どもの90%以上が成人になっており、「移行医療(トランジション)」が不可欠になっています。「慢性的な問題を持った子ども」(CSHCN: Children with Special Health Care Needs)が3人に1人、何らかの支援を必要としていると指摘さ

れました。

ケア体制を充実させるために、NPO 看護師が保護者の代理として学校へ入る方法が検討され実現しているなど医療的ケアの在り方が検討されているとの報告もありました。

学校との関係で、学習や教育が妨げられる原因として、「22q11.2 欠失症候群 (22q11.2DS)」があると説明をされました。

22q11.2 欠失症候群の子どもの特徴

- 人が好き (社会生活を送る上で、とても大事で良い事)
- 優しく、友達を大切にできる
- 自分の事より人の事を考えることができる
- 真面目でいつも一生懸命
- 暗記が得意。勉強は繰り返し行くと出来る
- 算数はサポートが必要だが、方程式を暗記すれば出来る
- 言葉でうまく伝えられなくても文章を書く・パソコンを使うことで伝えられる人も多い
- こだわりは減らす事が可能
- 本人の話を聞き、繰り返し説明し、周りが調整していくと、行動を変えることができる
- 色々な経験、チャレンジが大事
- 興味のあること得意なことがあれば、繰り返すと出来るようになる (ピアノが得意な子が、練習を繰り返すことで、発表会で演奏できた例もある)

性格・社会性

- 凝り性なところがある
- 今より先のことについて不安がることが多い
- 計画化され順序立てられた課題・ルーチンがないと不安になる
- ことばの問題でコミュニケーションが苦手な場合がある
- 周囲の人との遊び場でのコミュニケーションや、最新の流行について話をするのが難しい
- 言葉を文字通りそのまま受け止めやすい
- 言い回しが理解しにくい
- 表情を読み取ることが苦手
- 会話の流れがわからず、話題をすり替えてしまうことがある

運動能力

- 粗大運動 (全身を使う運動) が苦手
- バランスがうまくとれない
- 指先を使うこと、手先を器用に使うことが苦手
- 左右・上下・前後などの指示で動くことが難しい

(北村千章『22q11.2 欠失症候群の子どもに対する学習サポートガイド』より抜粋)

北村さんは 22q11.2 DS のサポートチーム代表をお務めで、子どもや家族のために活動をされています。22q11.2 DS は発達と行動、発話、言語、人格、気分、学習、注意力、気質に大きな影響を与える遺伝性疾患で、日本では 1991 年に診断されましたが、データはない状況だと説明されました。生徒や子どもが引き起こす「問題行動」にはその原因がありますが、遺伝性疾患が原因である可能性があります。私たち教職員は医療的な視点からの指導も常に意識しながら教育活動に当たりたいと感じました。22q11.2 DS に関心のある方は「NPO 法人親子の未来を支える会」、北村千章さんまでご連絡を。

(高水・須坂支部教文事務局長 安部和子さんの報告をもとに県事務局がまとめました)